



# SHIMODA

志 茂 田 景 樹

# NGEKI

正直に、ただ正直に  
生きている男。

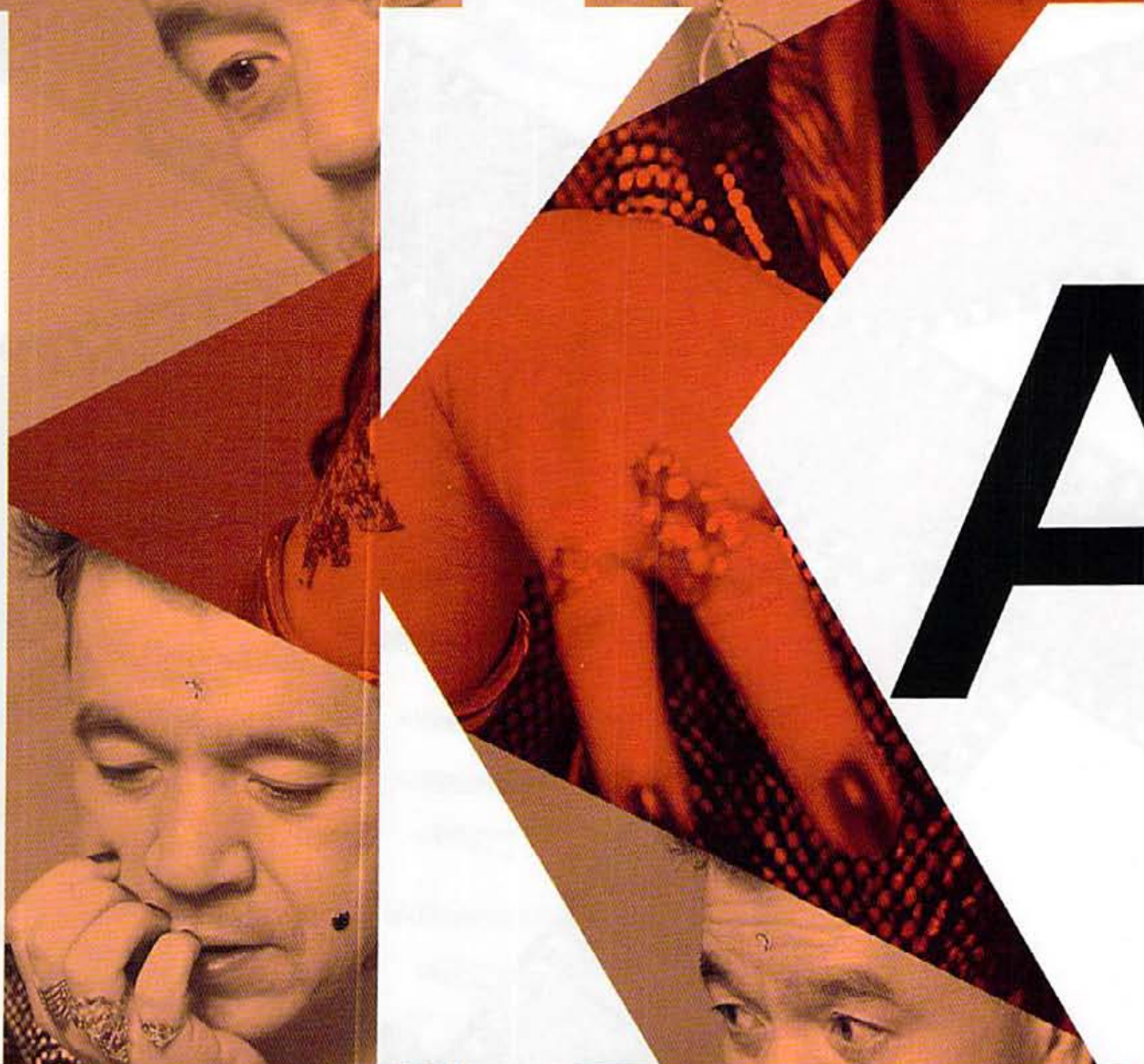
志茂田景樹というひとりの作家がいる。TVや雑誌の中に生き、そこから我々に夢の叶えかたや憧れへの近づきかたを教えてくれている人だ。自分の気の向くままに素直に生きるという大命題に、スッと自然に正対しているパイオニアの話聞こう。



THE  
REAL  
FACE

写真＝内藤貞保 ◎取材・文＝廣田幸祐

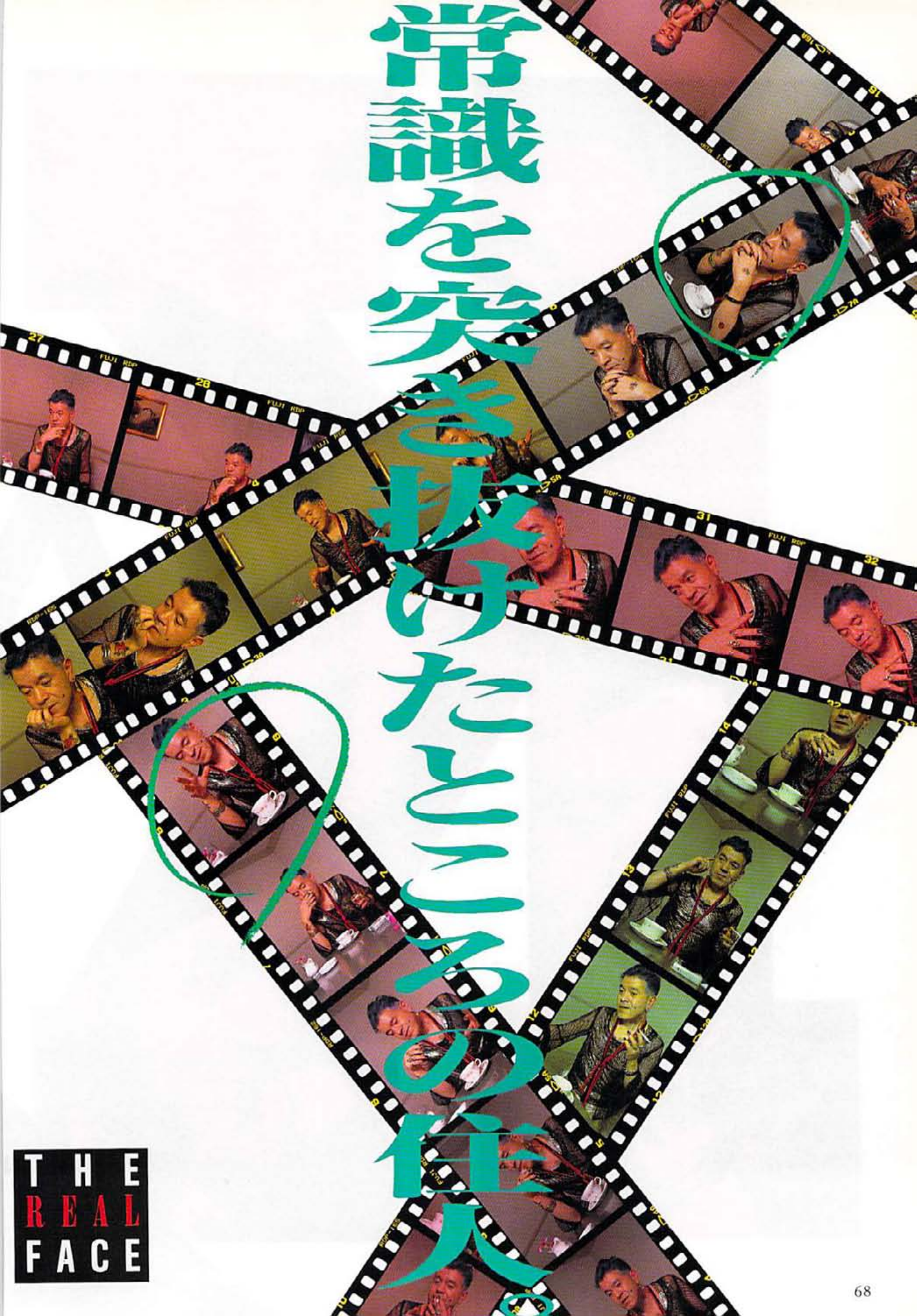
取材協力＝京都センチュリーホテル◎志茂田景樹事務所



A



# 常識を突き抜けたところの住人



THE  
REAL  
FACE

著作300超冊。これだけTVや雑誌に登場していて、一体いつ原稿を書いているのか、不思議になるほどハイペースの執筆。直木賞作家なら、もっとじっくりやってもいいのに……と素人のこっちが心配したくなるほど。何せ、小説現代新人賞を受賞したのが1976年、36歳のとき。直木賞を受賞したのが1980年。以来、17年直木賞からだ13年(の歳月が経っているとはいえ、300冊という数字は人間業とは思えない。近作では『孔雀警視』シリーズ(光文社文庫)が有名だが、最近『大三国志』『大水滸伝』ともに講談社)などの歴史物まで、いろんな幅広い分野に執筆の領域を拡げている氏である。

えっ、知りませんでしたか? それもそう、TVのブラウン管の中に登場してくる志茂田景樹というキャラクターはおおよそ文学とは結び付かないルックスをしているし、おまけにあの奇行である「奇行」が実は「喜行」だということとは後々判明するので、あしからず。まあ、ここまで有名になった氏であるから、氏が直木賞作家であることくらいは今や公然だが、はたしてどんな作品を書いていて、どんな人がそれを愛読しているかなんてことはまったく知らないはずである。確かに、尋常ではない。あのハテナな格好といい、中性的な動作といい、ソフツすぎるくらいに喋り口調といい、どこも意図的で、悪く言えばウサン臭い。ましてや、当年とって53歳だという。大人の画家が少しは潜んでいるのではないのか? TV的なキャラクターの人は、正直、

イメージが頭の中で出来上がってしまっているから、いざ本人を前にして質問となると、なかなか思うように行かないのが常だ。「ああ、TVで見ると同じだ」とボツとしてしまふ。特に、氏のような奇行派の場合、TVで見るとイメージが強すぎて、なかなか身のあつた話にならないことが多い。あくまでキツチュ。さらにイケイケときている。それでいて、直木賞作家。どんなところから話をほしくり出せばいいのかわからない。本当に難しいバターンだ。核心には辿り着けるのだろうか?

さて、当日、志茂田景樹氏は京都センチュリーホテルでのトークショーイベントにやってきました。氏の話はなかなか軽妙洒落で、さすがは作家の先生ノと噂するにはいられないものだった。話は昨今、氏が遭遇した事件に始まり、当初の疑問であった執筆の速度についても簡単に疑問が解決した。氏は「執筆」するのではなく「執筆プレクター」するというのが、頭の中に原稿用紙を描いて、そこに書き込むようにテープに向かって喋る。「ちよとど、暗算の早い人がソロバンを頭の中に描いて、それを弾くようなもの」。そのテープを起こし、原稿にするというやりかた。道理で、一人喋りはお手ものもの。情感のこもった分かりやすい言葉をひとつひとつ選びながら話せるのも、そんな日頃の「執筆レコ」の成果?

さて、話中、氏の人柄をよく表した言葉がいくつかあったので、拾ってみようと思う。

### 難しい話は大キライ

楽観的なんてしょうねえ、と笑う。大学を卒業した後、映画のエキストラ、モデル、保険調査員、建設業界紙記者、週刊テレビガイド記者などいろんな職業を転々としたことを「小説家になるために、わざとア」と聞いてくる取材もあるという。だが、氏の中にはそんな計算はない。確かにいろんな仕事をした経歴は小説を書く上で役に立っているが、最初から小説家を志望しての技、などと、志茂田景樹という人はそんな撥用な人物ではない。気のおもむくままに、生きてきた足跡がたまたま多岐に渡っていたというだけの話である。

「会社の名前とか、そういうことだけで、いろんな会社に勤めましたけど、いつも会社のシステムというが、人間関係や可能性の限界が見えると、すぐに飽きて、辞めちゃうんですね。けっして、深入りはしない。あつ、こんなもんかかって感じがなあ」

「会社の名前とか、そういうことだけで、いろんな会社に勤めましたけど、いつも会社のシステムというが、人間関係や可能性の限界が見えると、すぐに飽きて、辞めちゃうんですね。けっして、深入りはしない。あつ、こんなもんかかって感じがなあ」

### 心の表れ。

「とにかく、シリウスにならないから備つくことがなかった。今は、楽しかった思い出しか残っていない。そういえば、こんな仕事もやったんだな、こんな会社もあつたんだな、というくらいのものですね」

志茂田景樹といえは、何といつてもあのファッション。トークショーの話題にはもちろんその話も上った。「ティーン向け雑誌の編集長から電話が掛かってきまして、読者が選ぶセンスのいい芸能人ベスト10」にランクインしましたので、志茂田先生、ぜひコメントを、と言われましてねえ……

「何でも、ジャニーズ系のアイドルたちにも混じってランク入りしたと聞き、『喜喜とした』という話なのであるが、まあ、そんなにカッコよくはいかないと、それはいい話だと聞いていたら、何と「センスの悪い芸能人ベスト10」にも入っていると聞かれました。で、ベスト10の何位に入ってるんですか? と聞くと、「センスのいいほうは9位です」と、こう答えるんですね。じゃあ、悪いほうは何位ですか? と聞くと、「1位です」と」

「いい」と「悪い」の両方に入っていたのは氏とカールスモーキー石井米米ウラフの2人だけだったそうなので、自らを謙譲しながら、ファッション談義に花を咲かせるあたりは流石の粋といったところだが……。つまりは、こういうことだ。

「常識の枠を超えて、自分のしたいようにしようと思ってます」

# 思いを強く持つば必ず夢は叶う。



常識の枠を超えて、自分のしたいようにしたい

肌もあらわなシースルーの服も、細タイツも、長さの違うシューズもすべて、自分の思うがままのファッション。『何も、昨日までクレーのスーツを着ていて、今日いきなりこの服に着替えたってわけじゃないんです。こうなるには、ずいぶん歴史がありまして……』こう語るように、キツチュに見せるためや、インパクトを狙っての服装では決してないのだ。

『洋服はこう着なくちゃいけない、というようなことは本当はないんです。自分の着たいように、気に入るように着ればいいんだと思っただけです』

歴史がある。気ままでいい。ひとつひとつの言葉に説得力があるのは自らがそれを実践しているからに他ならない。いろんな仕事をし、また小説家の名声を得てからも、気の向くままに何にでも挑んでいく行動力の激せる業だ。

何者にも囚われない

トークショーに参加していた人の大半は「常識」に囚われている自分の小ささが歯痒く、バカバカしく思えたのではないだろうか。あるいはただただ志茂田景樹という人間が羨ましかったのではないだろうか。しかし、氏は、本来そうあるべき、理想的なやりかたを素直にやっているだけなのだ。「何者にも囚われない」という、実にシンプルなスタイルで。

そのやりかたを実践しているうちに、

氏はある種の結論めいたことを見つけただろう。こう言った。

『夢というものは、胸の中に強く持っている、いつか必ず実現するものなんです』

氏は自分の中に「夢」を強く持つことで、全部叶えてきたという。

最初は役者になりたかったんだそう。石原裕次郎の「嵐を呼ぶ男」にはエキストラでチョイ出している。結局、役者になる夢は「カナツチ」だから、という理由で諦めることになった(エキストラの仕事で海に飛び込むシーンがあり、こんなことまでしなきゃならぬのなら……)のだが、当時から台詞のある役を一度はやりたかった、というその願いは奇しくも後年、「制覇」という自らの作品の映画化で遂げられた。役者を諦めて、モデルになりたいと志望したこともあった。その夢も、やまと寛斎氏のショーに出ることで正夢とした。おまけに、1990年には自らが企画するブランド「K-1」まで登場させるという実現ぶり。もちろん、身につけている洋服はそのブランドのものだ。

夢は胸の中に強く持っている、いつか必ず実現する

トークショーの最中、氏はいきなり「じゃあ、歌います」と歌を歌い出した。小柳ルミ子の「おひさしぶりね」とブルハーツの「リンダ」。氏の歌はフジテレビお昼の番組でもおなじみ、かなり個性的な歌いかただ。それでも、氏の言う「思いを伝える」ための歌はキ

レイに歌うことでも、音程に忠実に歌うことでもない、というところを自らの歌を通して、観客に伝えようとして見事に伝わったのはこれまた流石だ。表裏兼通としての天賦の才能がそなわっているのだろう。

伝えたい気持ちがあれば、その気持ちは必ず伝わる

夢も気持ちも、強く思えば必ず叶うし、必ず伝わるということ。氏はトークショー中、ずっと言っていた気がする。少なくとも、志茂田景樹という夢見る一人は、そうやって夢と人生の成功を掴んだのだ。

そんな氏でも、今のよう生きかたができるようになったのは、ここ3年3年のことだ。もしかすると、氏は自分の選ばれた状況の中で気付いたことを伝えるために、TVに映り、雑誌に出、超ハイペースで小説を「執テレコ」しているのかもしれない。使命感があるかどうかは、おそらく本人も気付いていないことだと思ふ。ただ、氏の周辺が自然にそうなることだけは間違いないだろう。

映画を作る夢は、もう意志として動いている

利根的なイメージが強い氏の夢の中に「映画を作ってみよう」というのがあつた。TVや雑誌が時勢を無視して出来ないものであるのに対して、比較的時間をかけてゆっくりと「残そう」という意識で作る映画と

いう創作は志茂田景樹的ではない気もするのだが……

「昔から、映画の世界には憧れていて、いつか自分がその映画のために書いた本で、メガホンを取り、出演してみたい、という想いがあつた。だから、自分にとっては素直に、自分がキレイだと思っとうほうへ向かうだけでいい。いつか憧れていたから、映画もそんなものかなあ」

『夢』や『憧れ』なんて言葉がスリリと言えただけでも、特に今の時代には貴重な存在だ。現実の匂いがしない部分に憧れを見る、夢みがちな人生。氏は50年という年月を経て、それを掴んだ。その恩恵を少しでも受けて、有意義な人生を過ごしたい。志茂田景樹という存在はある意味で、うざったい垣根を取っ払ってくれたバイオニアだ。奇抜だ、キツチュだ、という邪な志茂田評しか持っていない人はずいぶん損をしている、というのが、氏に会った後の正直な感想だ。人は素直に生きるのが一番有意義で、一番難しい。志茂田景樹はそれをやっている。

## しもだのかけき

1940年静岡県伊東市生。  
中央大学法学部を卒業後、エキストラ・モデル・保険調査員など、20数種の職を転々とする。1976年「ヤマト」探偵で第27回小説現代賞受賞。1980年「黄色い牙」で第83回直木賞受賞。今年6月、著作が300作を突破する。社卒座・A型。